

令和 4 年 6 月 8 日現在

機関番号：17401

研究種目：新学術領域研究（研究領域提案型）

研究期間：2018～2019

課題番号：18H04174

研究課題名（和文）墓からみた良渚文化の社会構造研究

研究課題名（英文）The social structure of Liangzhu culture seen from burial system

研究代表者

久保田 慎二（KUBOTA, SHINJI）

熊本大学・大学院人文社会科学研究部附属国際人文社会科学研究センター・准教授

研究者番号：00609901

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では中国新石器時代後期の長江下流域において、高度に社会が複雑化したとされる良渚文化の階層構造について、墓の網羅的なデータベースからその詳細を解明した。良渚文化では南向きの頭位が採られ、墓壙の規模や葬具、副葬品の数量やその内容により階層表示が行われた。特に副葬品の内容は玉器や漆器、土器の双鼻壺などが顕著にその傾向を示しており、大型墓以外にも及ぶ明確な副葬基準が存在した可能性が高いと考えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

良渚文化の標式遺跡である良渚遺跡群は、2019年に世界文化遺産にも登録された世界的に注目を集める遺跡である。しかし、これまでの研究では、大型墓という一部の社会階層のみに注目が集まり、社会全体の構造が理解されていなかった。本研究では墓に注目し、良渚文化全体を包括する社会階層の一端の解明に成功した。

研究成果の概要（英文）：In this study, I clarified the structure of the social hierarchy of Liangzhu culture by constructing a comprehensive database of tombs. In Liangzhu culture, many tombs face south, and differences were found in the size, structure, quantity and quality of burial goods among the social classes. Especially in the contents of burial goods, jade, lacquer ware, pottery named "Shuangbiyu (双鼻壺)", etc. show a remarkable tendency. From the above, it is highly possible that there was a clear standard for burial in Liangzhu culture as a whole.

研究分野：考古学

キーワード：良渚文化 良渚遺跡群 社会階層 墓 副葬品 稲作文明 新石器時代

1. 研究開始当初の背景

本研究では、中国新石器時代の長江下流域に栄えた良渚文化の社会構造に焦点を当て、特にその階層構造と集団構造の解明を目指す。これまで中国考古学における社会構造研究は、黄河流域で活発に行われてきた。特にその大部分は、夏王朝や殷王朝に代表される初期王朝の形成過程の解明に向けられてきた。2001年から国家プロジェクトとして行われた「中華文明探源工程」では、社会の複雑化が王朝出現を間接的に示す要素と捉えられ、墓の規模や副葬品の内容が社会の垂直方向の差異である階層差を示す重要な指標とされた。このように、中国考古学では墓が社会構造を示す重要な指標と認識されている。

良渚文化でもこれまでに多くの墓が報告されている。特に良渚遺跡群で発見された玉器など豊富な副葬品を持つ大型墓は、遺跡内や遺跡間における階層構造の検討を通して、社会における相対的位置付けが論じられてきた〔中国社会科学院考古研究所 2010 など〕。ただし大型墓は多くが階層上位に属し、これらのみを論じても良渚社会の全体像を描くことは難しい。近年、発掘調査の増加により、良渚文化でも多くの小型墓が報告されている。社会全体の階層構造を論じるためには、これらも含めて改めて分析を行うべきであり、そこで初めて大型墓の相対的位置付けも理解できるのである。さらに全体を見渡す分析を行うことで、墓の属性の規則性に反映される良渚文化の墓制を解明できよう。社会の水平的差異である集団構造については、大型墓から出土する玉器を中心に、遺跡間の相対的關係が論じられてきた〔今井 1997 など〕。しかし遺跡内における墓の分布やそれらに基づく副葬品の差異を通じた精緻な分析は行われていない。これらの分析により、これまで不明瞭であった遺跡内の集団単位や集団間格差を知ることができよう。

以上、先行研究を批判的に継承し、良渚文化全体の階層構造と集団構造を解明する本研究を通して、良渚文化の複雑な社会を描出し、稲作文明の実態を示すことができると考える。

2. 研究の目的

本研究では良渚文化の墓として報告された資料を網羅的に集成し、その規模や副葬品、分布など様々な属性の分析を通して、良渚文化の社会構造を明らかにする。特に社会構造の中でも、稲作文明を支える都市や国家の成立を傍証する階層構造に焦点を当てる。また、階層化がいかなる単位で進展したのかを示しうる集団構造の解明についても目的に含めたい。本研究を遂行することで、良渚文化の複雑な社会を描出し、稲作文明の実態を示すことができよう。

申請者は、これまでの研究を通して良渚文化の文化要素が及んだ黄河流域の土器動態を整理し、土器を通じた編年観など本研究課題にも活かされる方法論を学んできた。また、実験的に土器伝播の背景を考察した研究では、物質文化の変化の背景にある要因を分析した。このような姿勢は本研究で扱う墓の物質面の差異を考えることに繋がる。先商文化の社会構造を考察した研究は、まさに本研究でも採用する研究方法のもととなっている。このように、これまでに積み重ねた研究が、本研究を立案し、遂行するための基礎となっている。

3. 研究の方法

まず良渚文化の墓に関する文献のリストを作成する。それをもとに、被葬者の階層性や墓の地域性を示すと考えられる項目を選定し、データベースの構築に取り掛かる。具体的には遺跡の地域、年代、墓の規模、頭位、構造、葬具の有無、副葬品の数量、内容、組成、被葬者の性別、年齢などを項目に入れる予定である。そして、ここまでで構築したデータベースをもとに、規模、構造、葬具の有無、副葬品の質と量、組成などの相関関係から良渚文化の社会階層を示す。さらに、その背景を考察するため、階層ごとの被葬者の性別や年齢などの属性との関係を検討する。また、頭位や副葬品の組成なども確認することで、良渚文化の墓制についても明らかにすることができる。

さらに、階層性の広がりを確認し、良渚文化全体の空間的な階層構造を明らかにしたい。墓の分布状況を確認することで集団単位を抽出する。そして各階層の墓がどのような単位で分布するのかを明らかにし、集団間の階層差を示す。そして、最終的にこれまでの研究を総括し、良渚文化における社会の複雑化の変遷を示すことで社会構造の一端を明らかにする。

4. 研究成果

本研究で最も核となる作業は、良渚文化の墓データベースの構築である。これについては、上記の通り、墓の所在する地域や遺跡名、構造、年代、頭位、規模、葬具、葬式、性別、年齢、副葬品の数量と内容などの項目を抽出し、データ入力を行った。結果的に、良渚文化の中心遺跡である良渚遺跡群の反山遺跡、瑶山遺跡、廟前遺跡、文家山遺跡、仲家山遺跡、さらには新地里遺跡、邱承墩遺跡、小兜里遺跡、福泉山遺跡、高城墩遺跡など墓が多く報告された遺跡をはじめとし、網羅的にデータベース化を行うことができた。

まず、単純な階層構造について規模や構造、葬具、副葬品の数量や内容から考えると、既往研

おり、大型墓以外にも及ぶ明確な副葬基準が存在した可能性が高いだろう。

本研究では、研究期間の最後に上記の検討結果や水平的な集団関係について、中国側のカウンターパートである浙江省文物考古研究所の研究者と検討を進め、さらに出土遺物の実見等を行う予定であった。しかし、その渡航計画を立てたところで COVID-19 の流行が始まり、現地への渡航が不可能となった。そのため、本来の最終年度である 2019 年度より 2 年間にわたり研究期間の延長を行った。それにもかかわらず 2021 年度下半期になっても状況は好転せず、現地調査が実現しない状況のままであった。そのため、上記検討の発表時期等を鑑み、2021 年度をもって本研究に一区切りをつける決断を下した。なお、本研究の成果の一部は 2018 年度日本中国考古学会等の学会で発表を行っており、今後、論文化を早急に進める予定である。

引用文献

今井晃樹 1997 「良渚文化の地域間関係」『日本中国考古学会会報』第 7 号
中国社会科学院考古研究所 2010 『中国考古学』新石器時代巻、中国社会科学出版社

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 3件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Katsunori Tanaka, Chunfang Zhao, Ningyuan Wang, Shinji Kubota, Masaaki Kanehara, Nobuhiko Kamiyo, Ryuji Ishikawa, Hiroyuki Tasaki, Minako Kanehara, Bin Liu, Minghui Chen, Shin-ichi Nakamura, Tetsuro Udatsu, Cailin Wang	4. 巻 2
2. 論文標題 Classification of archaic rice grains excavated at the Mojiaoshan site within the Liangzhu site complex reveals an Indica and Japonica chloroplast complex	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Food Production, Processing and Nutrition	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 松永篤知, 久保田慎二, 中村慎一	4. 巻 15
2. 論文標題 「稲作と中国文明」展における三次元海外遺物レプリカの展示	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 金沢大学資料館紀要	6. 最初と最後の頁 21-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 久保田慎二・宮田佳樹・小林正史・孫国平・王永磊・中村慎一	4. 巻 145
2. 論文標題 河姆渡文化の副食調理土器 学際的手法によるアプローチ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 古代	6. 最初と最後の頁 37-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 小林正史・久保田慎二・陳維鈞	4. 巻 38
2. 論文標題 スス・コゲからみた台湾北部の新石器時代～中近世の炊飯方法	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東南アジア考古学	6. 最初と最後の頁 23-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 久保田慎二	4. 巻 716
2. 論文標題 中国新石器時代末期から初期王朝時代の土器利用に関する学際的研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 月刊 考古学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 28-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 久保田慎二
2. 発表標題 土器、穀物調理と中国文明
3. 学会等名 国際文化資源学研究センター研究発表会 (第3回公開Webセミナー) (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 久保田慎二, 小林正史, 宮田佳樹
2. 発表標題 中国新石器時代長江下流域における土器利用の変遷 土器使用痕分析と残存脂質分析を中心に
3. 学会等名 日本考古学協会第86回 (2020年度) 総会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 久保田慎二, 小林正史, 宮田佳樹, 鏡百恵, 劉斌, 王寧遠, 陳明輝, 中村慎一
2. 発表標題 良渚遺跡群における煮沸土器の使い分け 卞家山・葡萄ハンの分析を中心に
3. 学会等名 日本中国考古学会2019年度大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 久保田慎二, 楚小龍, 楊樹剛
2. 発表標題 二里頭文化的竈与深腹罐
3. 学会等名 記念二里頭遺址科学発掘60周年国際學術研討会 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中克典, 上條信彦, 久保田慎二, 石川隆二, 田崎博之, 金原正明, 金原美奈子, 劉斌, 王寧遠, 陳明輝, 王才林, 趙春芳, 中村慎一, 宇田津徹朗
2. 発表標題 浙江省良渚遺跡群より出土したイネ種子のDNA分析
3. 学会等名 日本文化財科学会第36回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 久保田慎二
2. 発表標題 考古学的手法を中心とする土器研究と残存脂質分析の融合 中国の事例
3. 学会等名 日本文化財科学会第36回大会 土器科学分析研究会ワーキンググループ (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 S. Kubota, M. Kobayashi, Y. Miyata, G. Sun, Y. Wang, S. Nakamura
2. 発表標題 Rice Cooking Method in Hemudu Culture at the Tianluoshan Site, Zhejiang Province, China
3. 学会等名 Eighth Worldwide Conference of The Society for East Asian Archaeology (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 久保田慎二
2. 発表標題 新石器時代長江下游的炊器利用与其演变
3. 学会等名 中国考古学研究・第2届 中日論壇（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 久保田慎二・小林正史・宮田佳樹・北野博司・劉斌・王寧遠・陳明輝・中村慎一
2. 発表標題 良渚文化の蒸し調理と土器の使い分け 良渚遺跡群美人地遺跡を例として
3. 学会等名 日本中国考古学会2018年度大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 久保田慎二
2. 発表標題 田螺山与良渚的炊器用途和稻米的料理方法
3. 学会等名 浙江省文物考古研究所良渚工作站講座（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 久保田慎二, 小林正史 (中村慎一・劉斌 編)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 雄山閣	5. 総ページ数 101-110 (全365)
3. 書名 河姆渡文化と粥 (『河姆渡と良渚 中国稲作文明の起源』)	

1. 著者名 小林正史, 久保田慎二 (中村慎一・劉斌 編)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 雄山閣	5. 総ページ数 123-134 (全365)
3. 書名 良渚文化の蒸し調理の特性－米調理民族誌の比較分析を踏まえて－ (『河姆渡と良渚 中国稲作文明の起源』)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
中国	浙江省文物考古研究所	南京博物院考古研究所	河南省考古研究院	